

西洋道中膝栗毛

初編

上

14
1260
1



門 遠 184 14
節 1260
卷 1-24

假名垣魯文戲著



萬國

航海

西洋道中膝栗毛

東京書肆

萬笈閣



西洋道中膝栗毛初編序



稗官者流を蒸氣船と比較て謂り。各脚色の
原稿ハ檣火筒ニ彷彿。繪組の器扱ふ油を指て
走らば筆の車は兩輪彼石炭の烟ニ等し。此
忘語と正説を換骨奪體。バッテリーの手段を
盡し。看官の腹を測量。喝米を千里乃外。

西洋道中

序

採評を萬里¹得²ま³く欲⁴せ⁵ら。爰⁶に著⁷作⁸を
 膝栗毛⁹ハ例¹⁰の稗史¹¹と小同大異¹²新¹³奇¹⁴新聞¹⁵
 西洋道中¹⁶先横濱¹⁷を發端¹⁸。華採初¹⁹
 假名垣²⁰大人²¹が滑稽²²自在²³の航海術²⁴一度
 卷²⁵を披²⁶く徒²⁷も。於²⁸臍²⁹の火筒³⁰。湯衣³¹
 沸³²。腮³³の器械³⁴も破損³⁵つる。嗚呼³⁶奇³⁷

あ³⁸らう³⁹ル⁴⁰魯先生⁴¹妙⁴²なる哉⁴³。文⁴⁴才⁴⁵子⁴⁶實⁴⁷
 所⁴⁸此道⁴⁹の船將⁵⁰も。祢⁵¹々⁵²可⁵³なり⁵⁴と感⁵⁵
 ず⁵⁶る⁵⁷餘⁵⁸り。僕⁵⁹水⁶⁰夫⁶¹のマドロス⁶²もて旗⁶³の印⁶⁴も
 見⁶⁵分⁶⁶れど。亞蘭比亞⁶⁷馬⁶⁸の驥尾⁶⁹。附⁷⁰此⁷¹大⁷²
 艦⁷³。乘⁷⁴組⁷⁵。惣⁷⁶鉄⁷⁷張⁷⁸の鐵面⁷⁹。黒皮⁸⁰厚⁸¹の
 巾⁸²。も序⁸³々⁸⁴と爾⁸⁵云⁸⁶。

明治三庚午歲九月重陽早旦

東京淺草諏訪街の氷菰堂

碇泊の間

鏡舟

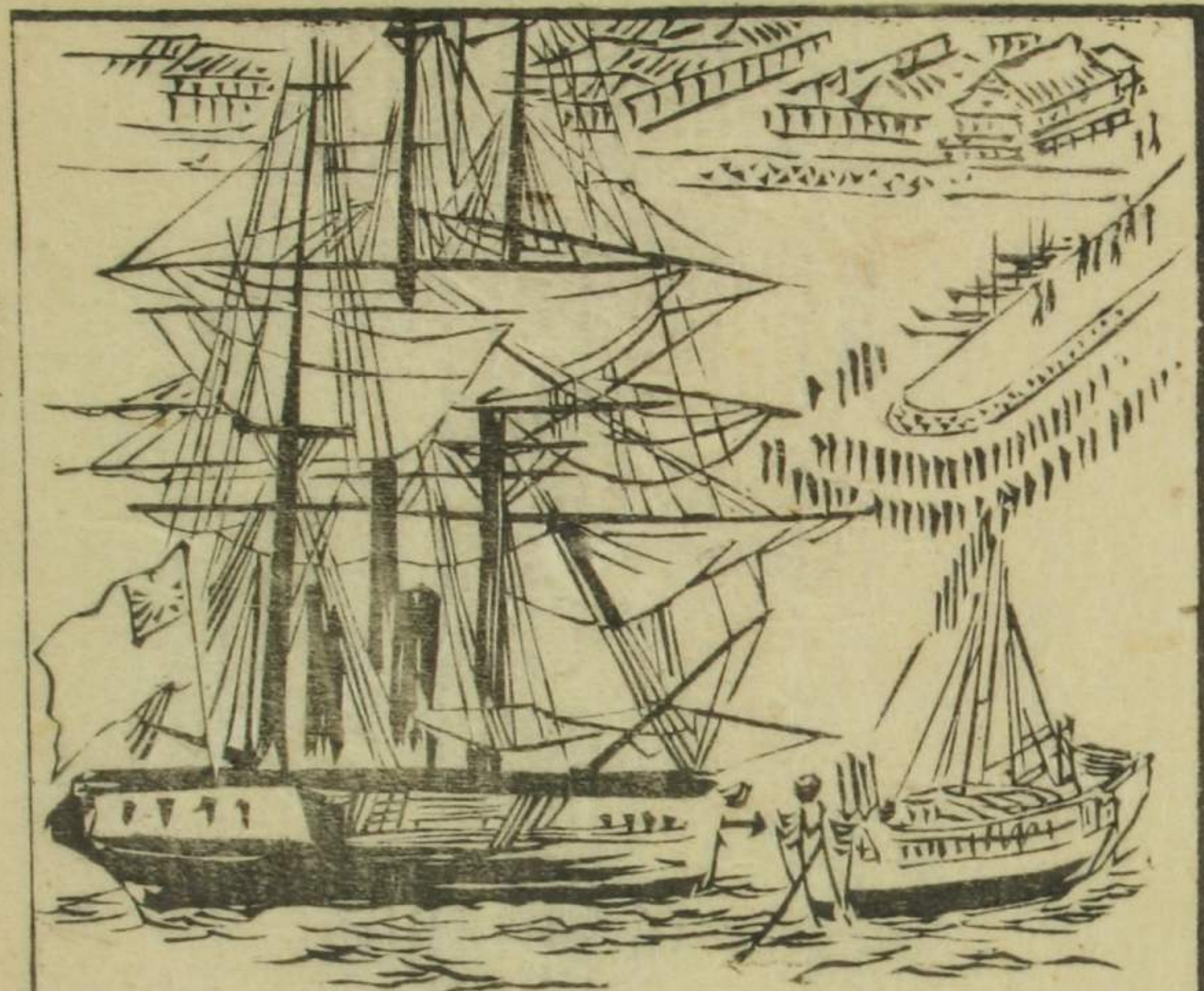
南港隱採人 河 丈紀戲題

鏡

河丈紀

凡例

○元祖十返舎一九ゴエンソ じゅうばんしゃいちゅうが作まある道中膝栗毛どうちゆう いざやうの初編はつへん刊行かんこうありて世よふ流布りゅうふせし、享和きやうわ二壬戌ににんじゆ歳の春はるはて當年とうねんを去さとと既きふ六十九年むそくじゅうしゅうねんふ及およべり滑稽こわいげんの妙逆旅めうぎやくりょの奇き至いたれり、尽つせりと虫所むしどころ謂い流行りやうこう送おくれの類るいひふ落目らくもく今いまの形勢かたちよいはなれば人情にんじやう齟齬そごまることのそまりは是こゝは次て二世三世にせさんせいの一九いちじゅう等とうが膝栗毛ひざくりげあれども時ときハ文政ぶんせいと隔へだたり弘化嘉永こうわがやえいと遠退とほのりたれば今いまハひびくとあり、またり僕やつれ年來ねんらい戲作げさくの筆ふでは口くちを糊のりせど滑稽こわいげんの道みちは疎そく笑語せうご頗おほく不可ふかはそ斯かる稗史はいしを綴つづらんこと世よの嘲あざわりを招まく似にれど活計かつけいを如何いかんせん



東去金川二里餘
四通五達築街衢
誰知七八十家市
便是繁華小荏都
軍艦の帆も
曲豆形る春の風
松伯

西海要三

九列二



西海要三

九列二

○趣向新奇を競ひ標目未發あるを可ありとせざるがゆゑは弥
 次北八の三世の孫等外國廻りの滑稽をりて此釋史の大意と
 せざるがゆゑは題号も西洋道中の目わり遮莫僕が文盲ある書
 (草冊子の外を讀む何を學ぶん異邦の事情然れども文物盛
 典の徳る近世福澤先生を始め諸々の洋學先生が著述さ
 れ翻譯の書とせしむる後その階梯ふとつたて大略お茶を
 濁せのめあり杜撰麻漏の釋官者流の性來あれば必だも論
 いて意中をそとにふる恥書ことを平常とせれば耻と
 思ふるのありと嗚呼自己あが達者ある哉

作者魯文自記



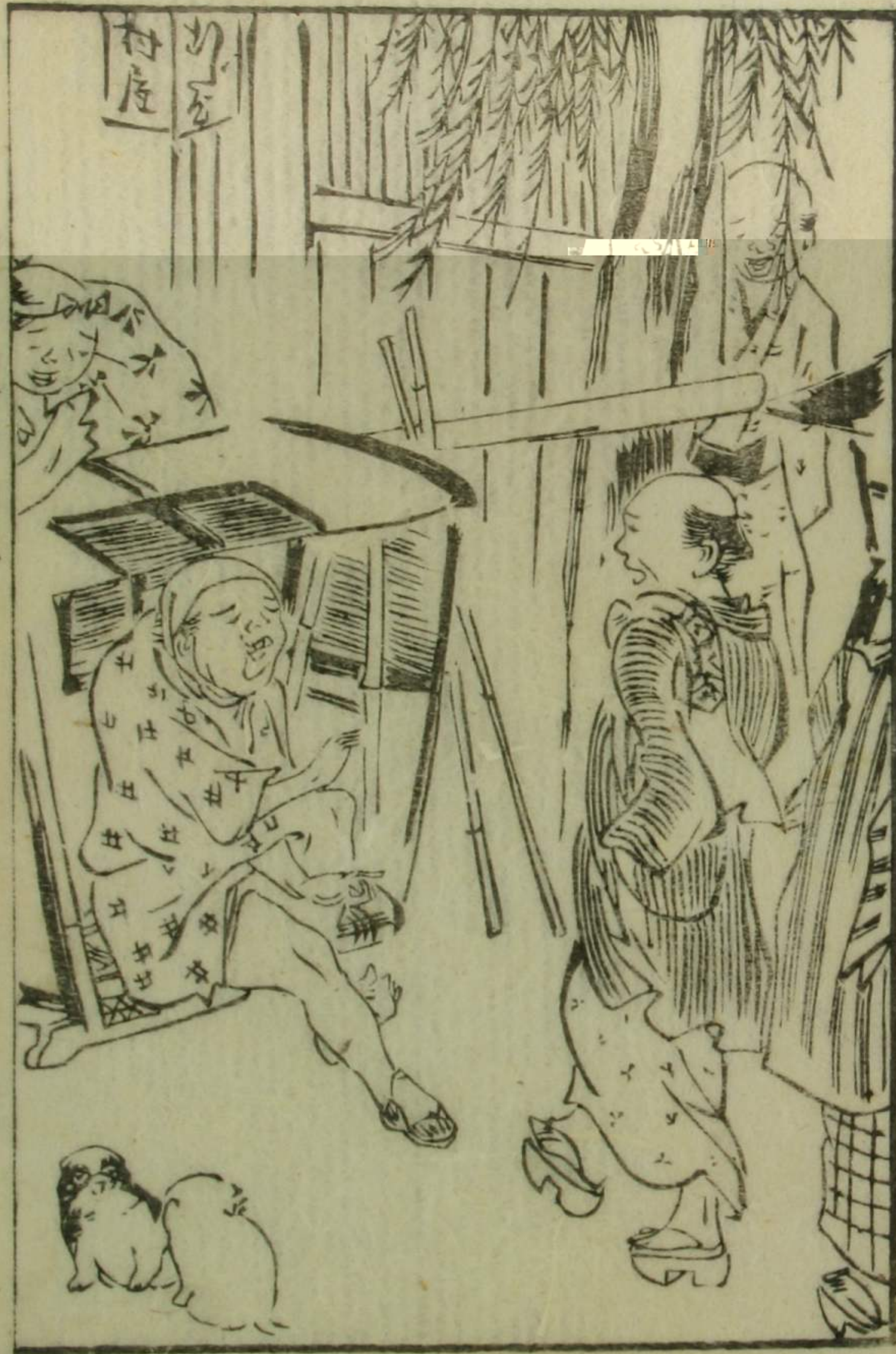
西洋道中膝栗毛初編上

日本東京 假名垣魯文戲著

夫天地者萬物の逆旅光陰の百代の過客あり。而して
 浮生の夢の若し。歡びを為せんと幾何ぞや。古人燭と秉
 つく夜を遊ぶ。良に以有也と。李白が桃李一編の病帳ふ
 落書せし。所謂一斗の酒真に似これと。能乾坤の旅情を
 尽せり然れども文明開化の當時の旅は往古より異
 なり。萬國世界を親類附合。さうらうに。陸より蒸氣車

海河子ハ葦と氣船の器械を備へ自國ハ庭中を巡るガ如ク。
鬼門關外遠シとせむ。五十三驛六十九次真の細道蝦
夷十州大砲一發三千里。首途の酒の醒ぬるは着府入
港神速ある。實は天恩の御新制最難御代
ありむや。茲は日本武藏の國。昔の大江戸當時の東京
かぐ神田の八丁堀は任居ハ名をり大槩ハ旅ハの光
陰を送り。切面屋孫次郎兵衛。此利喜多ハの二個
の者。一個宛の男子あり。瓜の蔓ハ茄子ハ生ハ彼彼

もろむじく旅好きて。親父の遺せし旅日記よ歩行餘じ
跡と踏園の東ハ房総常野近郷近在普く燈めく。真
羽の途中で黄泉の長旅ハ赴きし。其又梓等二個ありて。
是ぞ二世の跡次春右ハ。蛙の子ハ蛙と化り角ア蟹の初孫ハ。
後未緒ろ氣出して。伊勢ハ七夜旅世ハ三夜。立場と旅旅の版
ハ絶。道順豆。ととめ女と。傀儡女郎ハ剗染ガ出来。その年
明を銘々脊負込。辛抱駿河の國元ある。親父々々の本家
あり。神ある元手ハ借受。お旅といふ縁ハより。蟹の歩みの



西洋原光物止

六



西洋原光物止

三



1911

1. The first part of the book is devoted to a general introduction to the subject of the history of the world.

2. The second part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the beginning of the world to the present time.

3. The third part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the present time to the future.

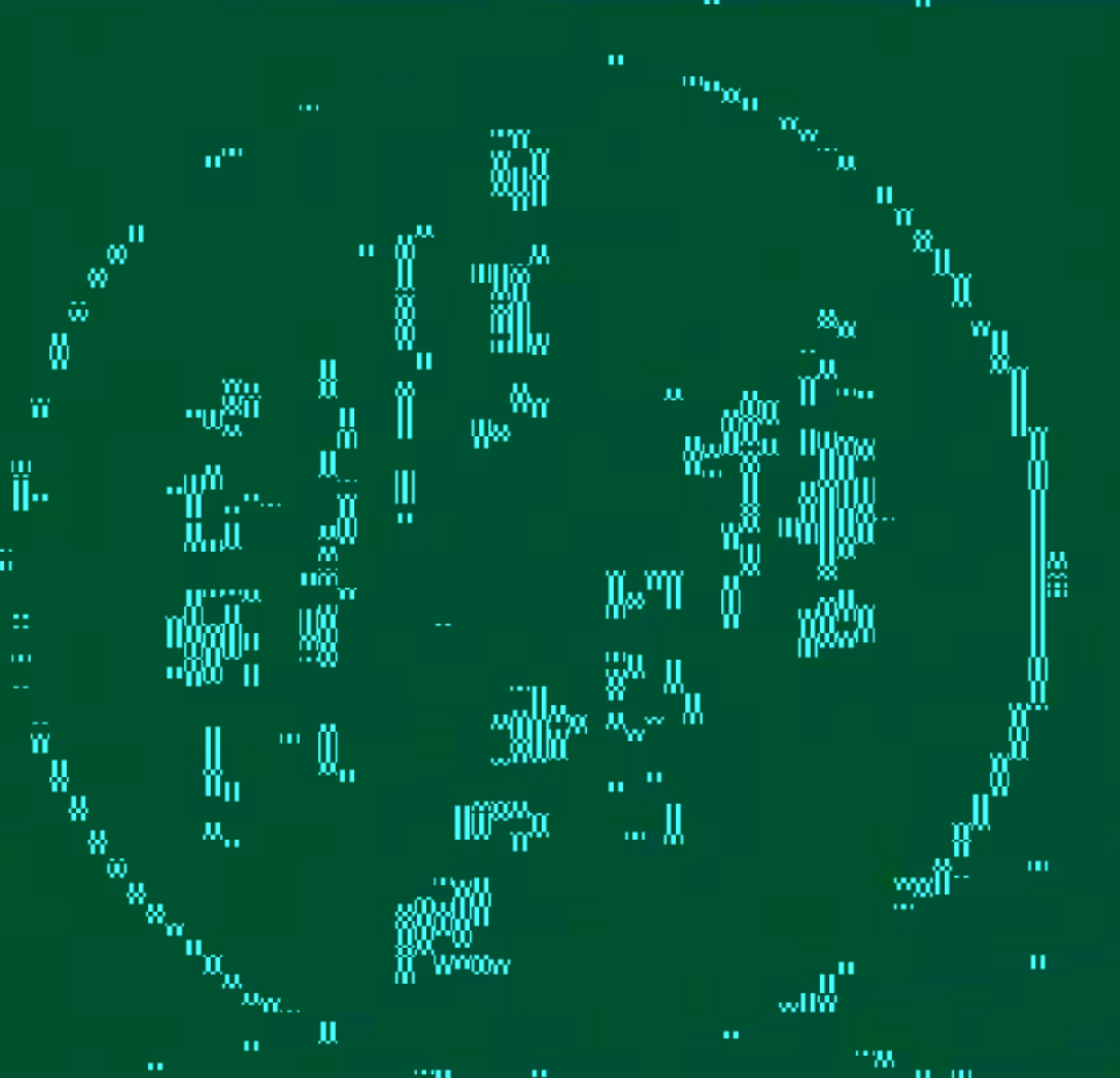
4. The fourth part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the future to the end of the world.

5. The fifth part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the end of the world to the beginning of the world.

6. The sixth part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the beginning of the world to the end of the world.

7. The seventh part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the end of the world to the beginning of the world.

8. The eighth part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the beginning of the world to the end of the world.



9. The ninth part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the end of the world to the beginning of the world.

10. The tenth part of the book is devoted to a detailed account of the history of the world from the beginning of the world to the end of the world.

くれろと頼まれてありやと頼まれと被疑の借用は
 あつれて未草稿をうそふまらざりてサイヤモウ王子安
 正が曰心不緻筆不耕を活業へらるせりんでござるま
 はせとトこの書生をとりあへんとあつてつりあれバリのありめじてござる
 学をあらとせらるこのま生は被疑のりやをあらとせらるこのま
 ひんをせと 一そんならハア先生方今所寄港の博識とぞん
 ざるよさのせんより矢張のだんまのびく由発のソト
 されどらうスアお知已のウある一は一執さう上て
 びよとせらるアントとちうへおまをそのす始何孫へへイ

有難うとせしませ何僕等へ博識ごの学考ごのと
 崇号たてまつられる秘の人物若やとせしませ
 んが當時武門を捨て身の上で外は活計のため
 かりがござりやせんうら東京うら此港へ流れて来て
 當時外國人の雜学を教へたり新聞紙の執
 や請文の著述でもして遊んでおやそのサハチアル
 そんな此方の先生へおつりヤア僕が如の塾生で中ご
 塾学中で何もせえや若やせんが寄港の事情へ

西洋風石印



西洋風石印

恥でもかかせあぐつちやアところちの後が念ねてその
 ちの目もさめぬううのちく店かあしをしてはうせう
 のごさたあとい肉を歩る時小まひの一文あし米へ一粒
 も後へう出てはあうその手あをーしてはてられると
 ったうあい今所の止ねごと一所ごううまごあアせひ
 帰るそのけうところちふ右四町の坊主あさんの如よみあ
 ちりりたる金ごけしハハ野毛の編屋へまじて南京
 果の仕切あうが云ああのをとらてくると都合ハあ

こけうううそとうとると三月たぬるの店賃の下つれも
 ちりり隣家の小者物屋で時借をーと暮衣も受
 てかへまー米も餅米も買てまうりあううう二三日うる
 さく給くやうふとまもも買てあうりまめくの布子と
 襦袢の帯やおとめさんのすそも身着をあやううひ
 版の代りふパンのめらうこのう有のを喰って漬物
 おてられろと老實くさうていふうう中さうとあつて持
 心して出してアうううこのあまうううぬらう

